**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第１７回　（２０１５年６月２日）**

**・第１７回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(11)頁**

・📖 **「神の化身シュリー・ラーマクリシュナ」**

（解説）

**・シュリー・ラーマクリシュナは神様の化身。ふつうの聖者ではない**

**・神さまの化身のは何ですか？**

について、前回の勉強会、また過去のインド大使館や大阪勉強会でも説明をしてきました。今日は

・**the power of touch（ひとれの力）──それは神様の化身の特別な印のひとつ**ですね。

（解説の前に、**『福音』がどれくらい特別か**、についての話）

先日神戸で大きな会議があり、協会は書籍を販売しました。そのときシヴァナンダセンター高円寺で私の話を何度か聴講した彼女が来て、『福音』を買うか、大きな本だから今回は買わないか、迷っていました。私は「本当は買った方がいい。いい本です」と言いました。彼女は買って、数日前に彼女から電話がきました。彼女の言葉をそのまま引用しますと「とってもとっても素晴らしいです」。近いうちに教会に来ると言っています。

また、Ｎさん（関西から協会に宿泊中のかた）。『ラーマクリシュナの福音』を買ったのは二年くらい前？

（Ｎさん）「もっと前です」

もっと前？　改訂版ですか？　前の本ですか？

（Ｎさん）「前の。二十年くらい前」（笑う）

 二十年くらい前に、どなたがその本を紹介しましたか？　その時はヴェーダーンタ協会を知らなかったでしょう？

（Ｎさん）北上の０先生の紹介で。

あなた、紹介されて、買いました。そして、飾り。（笑い）

ですけれども、今回協会に来て、『本当に福音を読む』が始まりました。

印象はどうですか？

　（Ｎさん）素晴らしいです。

　今、離れられないくらい、ずっと読んでるでしょう？

（Ｎさん）三章まで。

ずーっと読んでる、いつも。

私もその状態でした、最初、私も。

私はラーマクリシュナの僧院の学校（ドミトリー・全寮制でした）に１０歳で入りました。そのとき、週に一度、お坊さんからベンガル語で『ラーマクリシュナの福音』を勉強する時間がありました。日曜の９時から１０時というスケジュール。考えてみてください、子どもたちの気持ち。月曜から土曜日まで学校で、たった一日の遊びの日、日曜日に！（笑い）

そのお坊さんは、一時間のあいだ、『ラーマクリシュナの福音』を読んで説明してくれましたが、私は何もわからない。全然わかりませんでした。しかしそのお坊さんがとても楽しそうだったことは今でも覚えています。お坊さんはとても楽しんでいましたが、私たちは全然わからない、全然楽しめない。（笑い）『ラーマクリシュナの福音』の、最初の印象はそれでした。その印象があるのであまり読みたくなかった。

お母さん、お父さんが、強引に押し付けると、子どもは「いやだ」という気持ちになる、それ、ときどきありませんか？

（参加者）あります。

それで私はずっと読んでいなかった。

大学の時は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが大好き。もちろん、シュリー・ラーマクリシュナのことも尊敬していましたが、『福音』は・・・（マハーラージ笑う）「それはおじいちゃん、おばあちゃんの本」──その考えがありました。神様の悟りが人生の目標？──全然わからない。若い人の目的は、お金を稼ぐ、結婚、子供、それが普通なのに、『ラーマクリシュナの福音』の中には「神様の悟りが人生の目的」とたくさん書いてある。全然わからなかった。

私は僧院の大学を卒業して、法律の勉強のためコルカタの大学院に進みました（ここも全寮制でした）。その時私は、子どもたちに勉強を教えながらお金を稼いでいました。そして初給料をもらったとき、両親に何かプレゼントをしようと考えた。両親は信者だから本がいいと考えました。そこでお母さんのために『ホーリーマザーの生涯』、お父さんのためには『ラーマクリシュナの福音』。お父さんは信者でしたが、シュリー・クリシュナ、ヴィシュヌの信者だったので、ラーマクリシュナの写真はあったけれども本はなかった。だからあげようと思いました。でも自分が読んでいないものをあげることはできません、どのように素晴らしい本なのかの説明もできませんから。そこで、『福音』を読み始めたのです。そして最後まで読みました。

Ｍさんは本当はベンガル語で５つのパートで出版しました。あとで、すべて合わせて、別の出版社からひとつにして出されました。英語訳の本はひとつにまとめたものです。私はその中で３つのパートを買いました。私は覚えています。ワン、ツー、スリー。今も覚えています、それから離れたくない。あれ？　そんなに素晴らしい本を、どうして今まで読まなかった？　これは、本当に特殊な変化。

もちろん前からとても好きでしたけれども、読んで本当にタクールが好きになりました。それまでは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが好き、一番好きでしたが、それが今度は、一回読みだすと、もう離れたくない。その考え。もちろん前のサムスカーラとかいろいろありますけれども。時間が空きますと、またずっと読む。

私は１０歳のとき、『ラーマクリシュナの福音』を毎週読んでいました。しかし何も入ってこなかった。そして、夢中になったのは、たぶん２４歳。そしてその３年後にお坊さん。私だけでなく、ほとんどのお坊さんは、最初スワーミー・ヴィヴェーカ―ナンダ、しかしそのあと、『ラーマクリシュナの福音』が一番おもしろい。それを知りますと、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはもっと下（笑い）、それくらい、アトラクション、ひきつける。それくらい深い力があります。

私は１０歳から１４年後。Ｎさんは何年ぶりですか？

（Ｎさん）２５年くらいになるかもわからないですね。

そして今、「ああ、本当に素晴らしい」でしょう？　Ｎさんは、「私は死ぬ準備のために協会に来ました」と言っています、それはとてもいいアイディア。しかし、「死ぬ準備」とは言わない、「悟りの準備」。それを言ってください。**「解脱の準備」。「悟りの準備」。そのために『ラーマクリシュナの福音』を読むと、とても助かります。**

（Ｎさんに）あなた、解脱の準備、一番いいかもしれない。あなた、もちろん今まで、ヨーガスートラ、ウパニシャッド、読んでいます、いろいろな本が好きです、いろいろ勉強しています。しかし『ラーマクリシュナの福音』が一番いい。あなた、ウパニシャッドの理解ができるかもしれない。

（解説に戻って）

**Power of touch──それが今日の話です。シュリー・ラーマクリシュナの「ひと触れの力」によって、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは何を体験したのか、その例を三つ紹介します。**

**＜最初のひと触れ＞**

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワーミージー）がシュリー・ラーマクリシュナに初めて会ったのは、コルカタのある信者の家でした。二度目はドッキネッショルを訪問して、三度目もドッキネッショルに訪ねていきました。

その三度目の挨拶（面会）がとても有名です。

シュリー・ラーマクリシュナは、スワーミージーを近くに呼んで触れました。その瞬間、スワーミージーの周りのすべてはぐるぐると回りながら遠ざかり、なくなった状態になりました。そのときのナレン（スワーミージーの当時の名前）のフィーリングは、「死ぬかもしれない！」。それで大きな声で、「あなた、私に何をしたのですか？！　私にはお母さんもお父さんもいます！」と叫びました。

その経験の本当の意味は何？**その経験は「相対的な状態から絶対的な状態に入る」**という経験でした。

相対的な状態とは、たとえば人、物、部屋、荷物、みな相対的なものです。それらはみな、時間と空間で限定されたものですから。時間と空間は相対的なものの特徴ですから。一方、「絶対」とは、「相対的なものはない」状態です。時間と空間がない。人も部屋も荷物もない。その状態に突然入る──入る準備をしていなかったらとても怖いです。

サマーディも、「相対的な状態から絶対的な状態に入る」です。シュリー・ラーマクリシュナのサマーディはいつも突然でした。しかしどうしてシュリー・ラーマクリシュナはいつも自然的に入っていたのか？　それはシュリー・ラーマクリシュナには準備があったからです。しかしスワーミージーにはその準備がなかった。プールの飛込み競技。高い場所からクルクル回転してダイブします。その高い場所で、経験のない人が、背後から押されたら、どんな感覚になりますか？

（参加者）怖い。

とても怖いでしょう？　もちろん泳ぎ方は知っている、だが準備がない。スワーミージーは、相対的状態から絶対的状態に入る準備が何も無かった。だからとっても怖かった。

おもしろいのは、たったひと触れで相対的から絶対的の状態に入ること。また、たったひと触れで、絶対から相対の状態に戻ること。すべて元どおり。物も建て物もすべて同じ状態、何もぐるぐるしていない。

これについては全く説明できません。なぜ可能なのかもわかりません。しかしそれが起こった、それがスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの経験です。スワーミージー自身がそれについてを語っています。スワーミージーが怖がったからシュリー・ラーマクリシュナは、「ＯＫＯＫ今日はこのくらい。すぐにする必要はない」と言いました。（笑い）

当時のスワーミージーは、自分の意志力についてたいそう自信がありました。実際に他人と比べてスワーミージーの意志力はとても高かった。しかし、その人のひと触れで人格の意識をすべて無くしてしまい、今やその自信はなくなりました。恐怖とともに混乱も起こりました。この人はどんな人？　催眠術師だろうか？　でも、催眠術がかかるのは弱い心の持ち主です。心の強いひと、たとえばスワーミージーにはそれはきかない。スワーミージーは混乱しました。この人は催眠術師でも魔術師でもない。ただのマザー・カーリーの司祭。学者でもない。お坊さんの印も（お坊さんは服や髪形が独特だが、その特徴も）ない。外から見るととてもふつうの人。ですがその経験をした。とても混乱。これが一つ目の例。

　**＜二度目のひと触れ＞**

そのあと、スワーミージーは、同じ状況にならないようにととても気をつけていました。（笑い）

シュリー・ラーマクリシュナは、ドッキネッショル近くのあるお金持ちの別荘（ガーデンハウス）にスワーミージーを誘いました。スワーミージーは一緒に散歩に行き、またそこでれられました。

今度はすぐに無意識になりました。一度目は、怖い感情も感じたし大きな声も出せました。しかし今回はすぐに無意識になり、声も出せませんでした。シュリー・ラーマクリシュナがそのようにした目的は何だったのか？

シュリー・ラーマクリシュナは知っていました、スワーミージーは、サプタリシ（７人のリシ☞『ラーマクリシュナの生涯』下p366）の一人で、ひとびとを導くというタクール（シュリー・ラーマクリシュナ）の目的を手伝うために来たことを。自らそれを頼んでいたのですから、もちろんタクール自身がそのことを知っていました。

しかし、初めて触れたときのスワーミージーの「お母さん、お父さん！」という世俗的な反応に、タクールは少し混乱していた、私が呼んだ人はこの人だろうか、と。ふつうの人は、自分を“魂意識”ではなく“身体意識”と捉えていますね。そしてその意識によって、名前や、お母さん、お父さん、どこのうち、私は何歳といった考えがあらわれますね。スワーミージーの発した言葉もまさにそのあらわれだったからです。それで確認のため、**スワーミージーを無意識の状態、つまり、魂をなにものとも同一視していない状態にして、自分の本性に戻した状態で、さまざまな質問をした**のです──あなたの本性はなんですか？　本当はどなたですか？（答えは「聖者」でしょう？）何歳まで私を手伝いますか？（答えは３９歳でしょう？）──スワーミージーが魂意識でしゃべったことは、タクールが知っていたこととすべて合致しました。一方スワーミージーは、答えている時に意識も記憶もなく、またタクールのひと触れで元の状態に戻りました。手術台で麻酔にかけられた人のように。

考えてください、シュリー・ラーマクリシュナのその力がどのくらいのものか！　How powerful Sri Ramakrishna was!　スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはふつうの人ではない、大変意志の力の強い方。それでも、シュリー・ラーマクリシュナの力に抵抗はできませんでした。

**＜三度目のひと触れ＞**

その頃のスワーミージーはアドヴァイタ・ヴェーダーンタ（非二元論的哲学）に疑問を抱いていました。アドヴァイタ・ヴェーダーンタとは「すべてはブラフマンである」という考えです。

ふつう我々はいつも“実在”と“非実在”を区別しています。すなわち“意識がある”ものと“意識がない”ものを区別しているということです。意識がないものは“物質”、たとえばこの机など。意識があるものは“人間”“動物”など、というように。

アドヴァイタ・ヴェーダーンタの考えはそれとは異なります。「すべてはブラフマンである。すべての内に意識がある」。すなわち「物質の中にも意識がある」と考えます。なぜなら、「ブラフマン以外何も無い」「ブラフマンは偏在」だからです。その「遍在」の意味は、意識が人間の中にだけあり物質の中には無い、ということではない。その意味は、あらゆるところ、あらゆるもの、場所、人、時間、空間すべてに「神様以外何も無い」という意味なのです。そしてもし、「ブラフマンは偏在である」ということを本当に信じると、意識がある、ない、の区別はなくなり、物質の意識は「寝ている」か「あらわれていない」か、ただそれだけとなります。木材の内に眠る「火」は、木と木をこすり合わせると「あらわれる」、発火しますね。「木材の内の火はあるが見えない」だけ、それと同じこと。

ある日、シュリー・ラーマクリシュナは自分の部屋で、「すべてはブラフマンである。ブラフマン以外何もない」と話していました。ナレンはそれを聞いていました。ハズラもそれを聞いていました。ハズラは、当時ドッキネッショル寺院に住んでいた、おもしろい方（☞『ラーマクリシュナ生涯』下p388）。ナレンとはとても友達。ハズラはタクールの言うことに反対意見を持っていました。スワーミージーも理解できないことには反対意見を述べて、時々議論していました。

彼らはベランダに出て話しました。すべてはブラフマン？　すべては神様？　それは変じゃないですか？　人が神様なのは分かります、動物も神様なのも分かります、しかし、ポットも神様、茶碗も神様、それは神様のイメージではない、おかしいではないですか？　そう言って、シュリー・ラーマクリシュナの言うことをベランダで笑っていました。

シュリー・ラーマクリシュナはその笑い声を聞いてベランダに出てたずねました、「あなたたち、何を話しているのですか？」。そしてナレンに触れました。その結果は、『スワーミー・ヴェーヴェーカーナンダの生涯（p57）』『ラーマクリシュナの生涯（下p391）』に書いてあります。とても有名な話ですからね。

そのひと触れによってなにを経験したか？　ドッキネッショナルからコルカタに戻っても、**「すべてはブラフマン、すべては神」**そのヴィジョンがあらわれて消えませんでした。“物質”と“意識あるもの”との区別ができなくなりました。「すべてが神様、神様、神様」の意識があらわれ続けました。だから、たとえば車が来ても何も気をつけない、自分と車は同じものですから。だから怖くもない。怖くないから気を付ける必要もない。また、食事の時も、みな、ブラフマン。ご飯も意識、お皿も意識、給仕するお母さんも意識。通常の状態ではなくなったスワーミージーは混乱しました。しかしそれは**「目覚めた」状態**でした。

我々には混乱はない。我々は、これは人、これは物、と区別ができるからです。意識があるものとないものの区別ができます。しかし、目覚めた状態になると、すべてがブラフマンですから、今までとまったく違ってとても大変になります。

スワーミージーは公園にいました。そこには鉄のフェンスがありました。スワーミージーはフェンスを鉄と考えず、意識と考えました。スワーミージーには以前の記憶があるうえに、すべてはブラフマンであるという新しい経験もしている。だから矛盾が起きていたのです。そこでテストをしました。自分のひたいをフェンスに打ち付けて、これは意識か？　これは物質か？　その混乱で、何もできなくなりました。その経験は三週間ほど続きました。やがてだんだん薄れていきました。

それからあとスワーミージーは、聖典の言うことに反対しなくなりました。「すべてはブラフマン。すべての内に意識がある」という聖典の言葉を、１００パーセント正しいと考えるようになりました。シュリー・ラーマクリシュナのひと触れで、その影響で。

もし、シュリー・ラーマクリシュナが他の人に触れたら、どうだったでしょうか？　同様なことが起こったでしょうか？　そうではない。もちろんシュリー・ラーマクリシュナのひと触れはとてもパワフルですが、スワーミージーは特別、とても神聖でとても清らかピュアでした。だからこれらの出来事が起こりました。ハズラに触れても、そのような結果は出ない。（笑い）

**シュリー・ラーマクリシュナは特別。スワーミージーも特別。その両方による結果です。**

　これら三つの例は、シュリー・ラーマクリシュナが触れたときの例でした。シュリー・ラーマクリシュナは、意図するだけでも経験を与えることができました。

**＜意図するだけでニルヴィカルパ・サマーディを与えた例＞**

ニルヴィカルパ・サマーディは、“瞑想”と“瞑想する人”と“瞑想の対象”がひとつになった、（ある見方では）最も霊的に高い、最高の意識、最高の至福の状態です。

スワーミージーは、いつもシュリー・ラーマクリシュナに頼んでいました、ニルヴィカルパ・サマーディの状態をください、くださいと。タクールは、「あなた、覚えていませんか？　私が最初に触れたとき、『私には両親がいる』と恐がっていました。今になって、どうして絶対の状態の経験が欲しいですか？」とからかいながら答えていました。（笑い）スワーミージーは何も言いません。（笑い）勉強と実践により準備ができていたある日、スワーミージーが瞑想をしていたら、身体が死人の状態のようになったのです。心臓の鼓動はない！　　身体は冷たい！　硬直している！　そのとき、年長のゴパール（タクールの信者。のちのアドヴァイターナンダジ）がそれを見てとても怖がり、泣きながら走ってシュリー・ラーマクリシュナの元へ行き、「ナレンが亡くなりました」と伝えました。

シュリー・ラーマクリシュナは何も反応しない。なぜならスワーミージーは、「ニルヴィカルパ・サマーディの状態に入りたい」と何回も何回も頼んで、せがんで、シュリー・ラーマクリシュナを困らせていましたから。ニルヴィカルパ・サマーディのときの身体の状態はまさに死んだ人の状態ですから。詳しいことは『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』（☞p81）に書いてあります。

やがてだんだん意識も体温も戻ってきました。しかし「私の頭」という意識は戻っても、「私の足」「私の手」という意識が戻りませんでした。ゴパールお兄さんに「私の足がない。私の足はどこ？」とたずねると、ゴパールはスワーミージーの足をマッサージして「これがあなたの足、これがあなたの手」と教えました。そしてニルヴィカルパ・サマーディの状態から１００パーセント戻って、シュリー・ラーマクリシュナのもとに行きました。シュリー・ラーマクリシュナは言いました、「あなたの頼みは叶いました。しかし、聖なる母の仕事をするために、あなたのその状態をロックします、鍵かけます。仕事が終わって開けるまで、その鍵は私が持っていましょう」。

スワーミージーはその後もその経験を欲しがった、とても素晴らしい経験ですから。そのあと一度だけもらいましたが、また鍵をかけられました。

**シュリー・ラーマクリシュナは、意図するだけで、スワーミージーに最高の経験、ニルヴィカルパ・サマーディを与えました。**

のちに、サーラーダーナンダジがコメントをしています。身体についてのサムスカーラはとても深い。スワーミージーでさえ、ニルヴィカルパ・サマーディに入って魂意識となっても、戻ってきたら、「私の足はどこ？　手はどこ？」足も手も見えないが、それは記憶の中にありました。これがおもしろい。なぜなら、その記憶がなければ、元の状態に戻れない。元の状態に戻らなければ、仕事ができない。身体意識がなければ、仕事はできないでしょう？　しかし、ニルヴィカルパ・サマーディの経験もずっと内に在りました。その経験、その知識はなくなりませんでした。**これがおもしろい、両方続けてある、ニルヴィカルパ・サマーディの経験も、身体意識も。そうしないと神様の仕事はできないからです。**

だからニルヴィカルパ・サマーディの経験もすぐ思い出す。そしてニルヴィカルパから戻ると、**すべては「影」のように見えます。すべてはものではなく、影。人ではなく、影。外から見ると、ふつうの人と何も変わらない、食事もする、話します、怒ります、笑います。ですが、ある部分、いつもニルヴィカルパ・サマーディの状態、すべてはブラフマンの状態。**

**どんなに聖典を聞いて勉強しても、その経験がなければ、物と物、人と人、人と物を区別する認識は変わりません。この、サマーディに入らないと、“区別をする”知識はなくなりません。サマーディに入ると、名前と形があるものはすべての区別がなくなって、ひとつである。その経験が出ます。日常のふつうの生活のときには区別していますが、内ではひとつであると理解しています。**

　（『福音』勉強会第１７回、以上）